

大阪文化財センター調査報告 XXX

(財) 大阪文化財センター
大坂城跡発掘調査事務所

淡輪・箱作海岸地区 海岸環境整備事業
に伴う田山遺跡試掘調査報告書



昭和 54 年 1 月

財団法人 大阪文化財センター

大阪文化財センター蔵書

淡輪・箱作海岸地区 海岸環境整備事業
に伴う田山遺跡試掘調査報告書 正誤表

頁	箇 所	誤	正
4	14 行 目	11月 20 より	11月 20 日より
25	1 行 目	堀	鍋
26	12 行 目	平 定	平 安
図版 15・上の写真		遺物の番号は下記のとおり	
		1	2
		3	4
		5	6



1



2



3



4



5



6

例　　言

- 1) 本冊子は財団法人大阪文化財センターが大阪府岸和田港湾事務所の委託を受けて実施した、淡輪箱作海岸地区海岸環境整備事業に伴う田山遺跡試掘調査報告書である。
- 2) 調査に要した費用（￥6,568,000）は全て大阪府岸和田港湾事務所が負担した。
- 3) 調査は財団法人大阪文化財センター業務課業務第3係が担当し、昭和53年11月20日より昭和54年1月31日まで実施した。
- 4) 出土遺物については、和歌山県教育委員会松下彰氏に適切な助言を得た。また、大阪府岸和田港湾事業所、同岸和田土木事務所、同青少年対策課、阪南町役場、地元奥定雄氏らには多くの点でお世話になった。厚く感謝の意を表する。
- 5) 現地調査並びに整理作業には、下記のものが担当した。

業務課 第3係長 酒井龍一

主査 井藤暁子

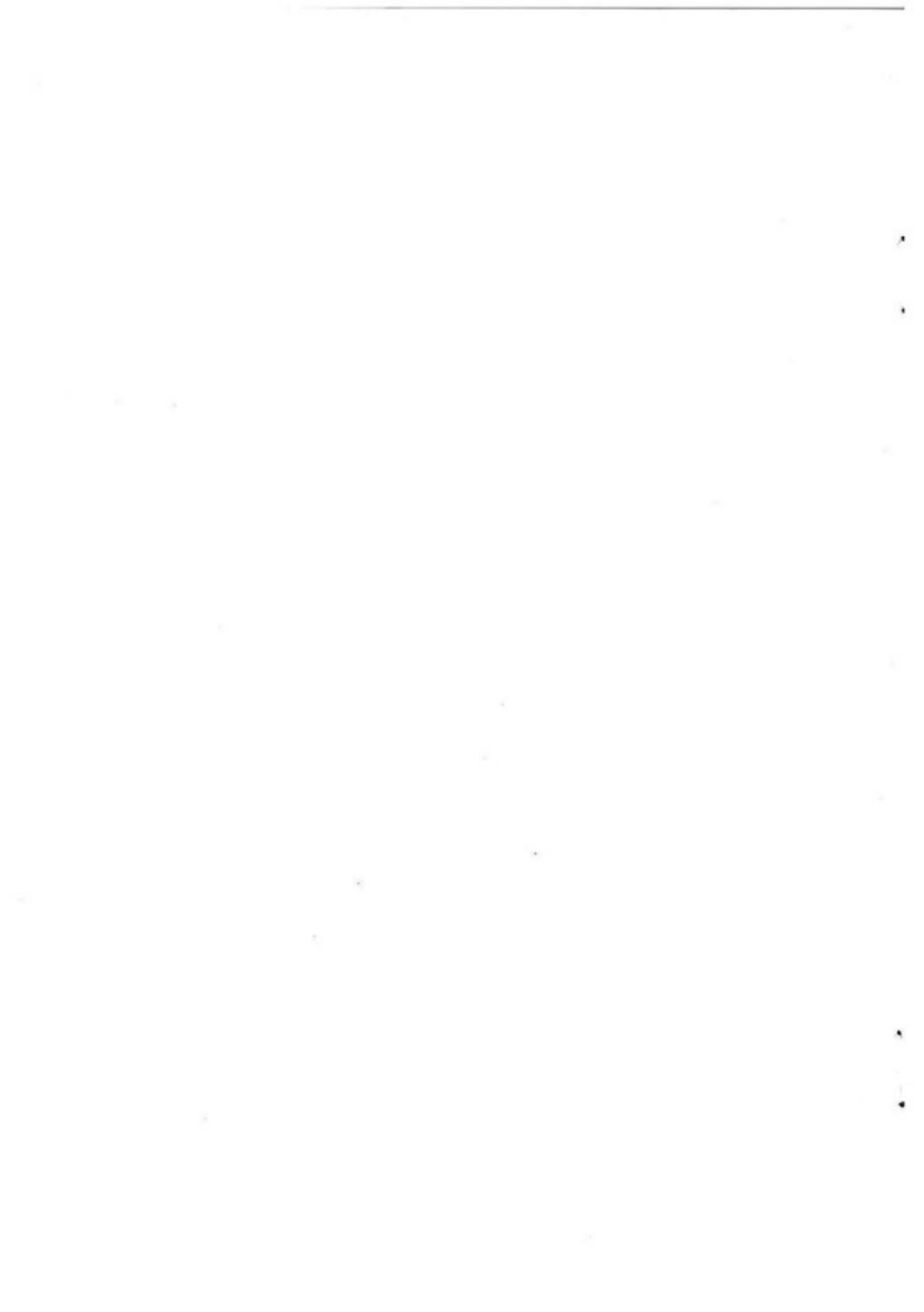
技師 国乗和雄

技師 畠 幡子

タ 舟山良一

総務課普及係技能員 立花正治（写真担当）

- 6) 挿図第1図には、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図『岸和田』、『尾崎』、『和歌山』、『粉河』を複製使用した。



淡輪箱作海岸地区海岸環境整備事業 に伴う田山遺跡試掘調査報告書

目 次

例 言

〔I〕 調査に至る経過.....	(国乗和雄)	4
〔II〕 位置と環境.....	(舟山良一)	4
〔III〕 調査の目的と方法.....	(国乗和雄)	8
〔IV〕 調査の結果.....	(国乗, 舟山).....	10
〔V〕 ま と め.....	(舟山良一)	25

図 版 目 次

1 田山遺跡遠景
2 田山遺跡遠景
3 No.1, 2, 3, 4 トレンチ遺構
4 No.1, 3, 4 トレンチ断面
5 No.5, 6, 7 トレンチ遺構
6 No.5, 6, 7 トレンチ断面
7 No.8, 9, 10 トレンチ遺構
8 No.8, 9, 10 トレンチ断面
9 No.11, 12, 13, 14 トレンチ遺構
10 No.11, 12, 13 トレンチ断面
11 No.15 トレンチ遺構
12 No.16 トレンチ遺構
13 No.17 トレンチ遺構
14 出土遺物
15 出土遺物
16 出土遺物
17 出土遺物

挿 図 目 次

1 調査地の位置と周辺の遺跡図 (1/5万)
2 調査地周辺の地形図 (1/1万)
3 トレンチ配置図 (1/2500)
4 No.1 トレンチ断面実測図
5 No.2 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
6 No.3 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
7 No.4 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
8 No.5 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
9 No.6 トレンチ平面断面実測図
10 No.7 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
11 No.8 トレンチ上層遺構面平面断面実測図
12 No.9 トレンチ平面断面実測図
13 No.10 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
14 No.11 トレンチ平面断面実測図
15 No.12 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
16 No.13 トレンチ平面断面実測図
17 No.14 トレンチ下層遺構面平面断面実測図
18 No.15 トレンチ平面断面実測図
19 No.15 トレンチ出土遺物実測図
20 No.16 トレンチ平面断面実測図
21 No.17 トレンチ平面断面実測図
22 No.17 トレンチ出土遺物実測図

〔I〕調査に至る経過

現在、大阪府は泉南郡阪南町箱作より、同郡岬町淡輪に至る大阪湾岸の環境整備事業を計画している。

大阪府土木部では、これら事業の実施に伴ない、箱作地区の国道26号線より大阪湾岸に至る迄の進入路の造成を計画したが、計画路線上には田山遺跡が含まれていることから、本事業実施面における遺跡の取り扱いについて、大阪府教育委員会と協議を行った。その結果、大阪府教育委員会では、計画されている进入路は田山遺跡内を通過することとなることから、事前に道路建設予定地内に遺構等の存在の有無、範囲確認のための試掘調査が必要であることを回答した。

この回答により、大阪府土木部から当大阪文化財センターに調査の要請があり、双方で実施計画書等について種々検討を加えた後、昭和53年11月18日付をもって岸和田港湾事務所と当大阪文化財センターとの間で、試掘調査の委託契約を締結することとなり、当センターが同年11月20より54年1月31日までの間、調査を実施した。

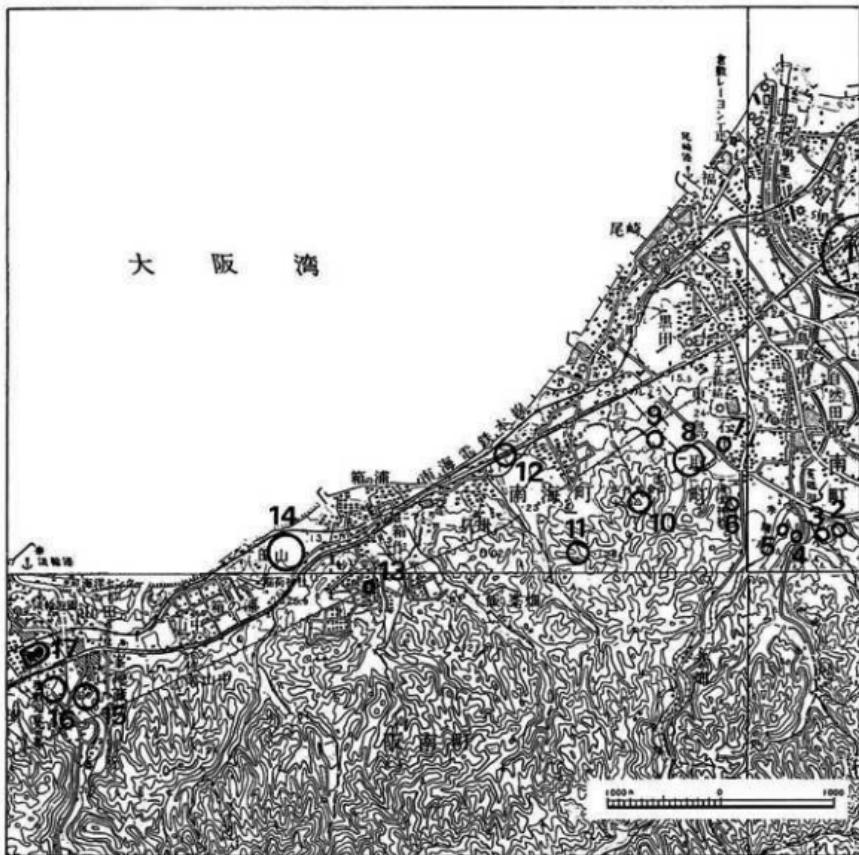
〔II〕位置と環境

田山遺跡は大阪府泉南郡阪南町箱作に所在する。

南海本線箱作駅からほぼ線路に添って西へ1kmほど行くと家並が途切れ、地元の人が玉ねぎ小屋と呼ぶ小屋の点在する畠地に出る。そこが田山遺跡である。

大阪湾に面した平地は南へ行くほど狭くなるが、阪南町と泉南市の境を流れる男里川以南は特にそれが言える。田山遺跡が立地する平地は、西は現在宅地になっているが、本来は西・東を和泉山脈から派生してきた丘陵にはさまれ、北へ開いた扇状地状の地形である。北は大阪湾に面しているが、海岸は狭く、すぐ高さ約10mの崖となっている。この崖面では砂岩や砂が入り混じった状態が観察できる。これは陸化した大阪層群の上に川の堆積作用によって形成され

大阪湾



- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 男里遺跡 | 10. 三升五合山遺跡 |
| 2. 玉田山遺跡 | 11. 塚谷古墳群 |
| 3. 玉田山古墳群 | 12. 貝掛遺跡 |
| 4. 寺田山遺跡 | 13. 箱作古墳 |
| 5. 岩崎山遺跡 | 14. 田山遺跡 |
| 6. 石田山遺跡 | 15. 鴻ノ巣山古墳 |
| 7. 神光寺跡 | 16. 淡輪遺跡 |
| 8. 蓬池遺跡 | 17. 宇土墓 |
| 9. 三昧谷遺跡 | |

第1図 調査地の位置と周辺の遺跡図

たもので、古い扇状地構成物である。古い扇状地は地盤隆起の影響を受け、段丘となったが、和泉山脈の隆起につれて段丘も動き、古くて早く段丘になった扇状地ほど、高くて傾斜の度合いが大きいものとなった。これらは高・中・低位の段丘に分けられる。そして、川はこれらの段丘を刻み込み、現在見るような緩傾斜の台地と深い川という景観を呈することになった。男里川流域を除いて阪南町の平野部の大部分を構成するのが、この扇状地性の台地である。

（注1）

田山遺跡は低位段丘上にのっている。標高は北端の海岸崖上で約10m、南の田山稻荷東方で約24mである。

さて、田山遺跡では須恵器・瓦器・サヌカイト・石錘等が採集され、弥生時代から中世まで存在した可能性が考えられている遺跡である。しかし、当地方に人間が住みだしたのは、旧石器時代までさかのぼるようである。いずれも表採や流れ込みであるが、田山遺跡東4～5kmにある玉田山古墳内（3）、玉田山遺跡（2）、蓮池遺跡（8）でポイントが発見されている。

（注2）

縄文時代になると、前述の玉田山遺跡の他に、男里川流域の低段丘・低地を取り囲む丘陵縁辺に寺田山遺跡（4）、岩崎山遺跡（5）、石田山遺跡（6）、蓮池遺跡が知られている。しかし、詳細は判明していない。

弥生時代では男里川流域の男里遺跡（1）がよく知られている。中期の土器が採集されている。

（注3）

古墳時代前期の古墳は知られていないが、中期では、田山遺跡西2.2kmにある宇土墓・西陵墓を含む淡輪古墳群が存在する。後期の古墳群としては、西より鴻ノ巣山古墳群（15）、塚谷古墳群（11）、玉田山古墳群（3）が知られている。なお、田山遺跡東0.6kmに全長30mを測る前方後円墳箱作古墳があったが、破壊されてしまった。

弥生時代～古墳時代では、土器・埴輪・石室形態等の点で、紀伊との関係に注目しなければならないようである。

奈良時代以降の遺跡としては、平安時代の寺院跡である神光寺跡（7）がある。他に、田山遺跡北東3.2kmにある三昧谷遺跡（9）、更に蓮池遺跡（8）では、詳細は不明ながら中世の土器が採集されている。なお、近世では、和泉砂

（注2）



第2図 調査地周辺の地形図 (1/10000)

岩を加工した石工集団が有名である。

（注1）阪南町史編さん委員会『阪南町史』1977年

（注2）玉田山古墳発掘調査団『玉田山古墳発掘調査概要』1961年

（財）大阪文化財センター73年・76年報告

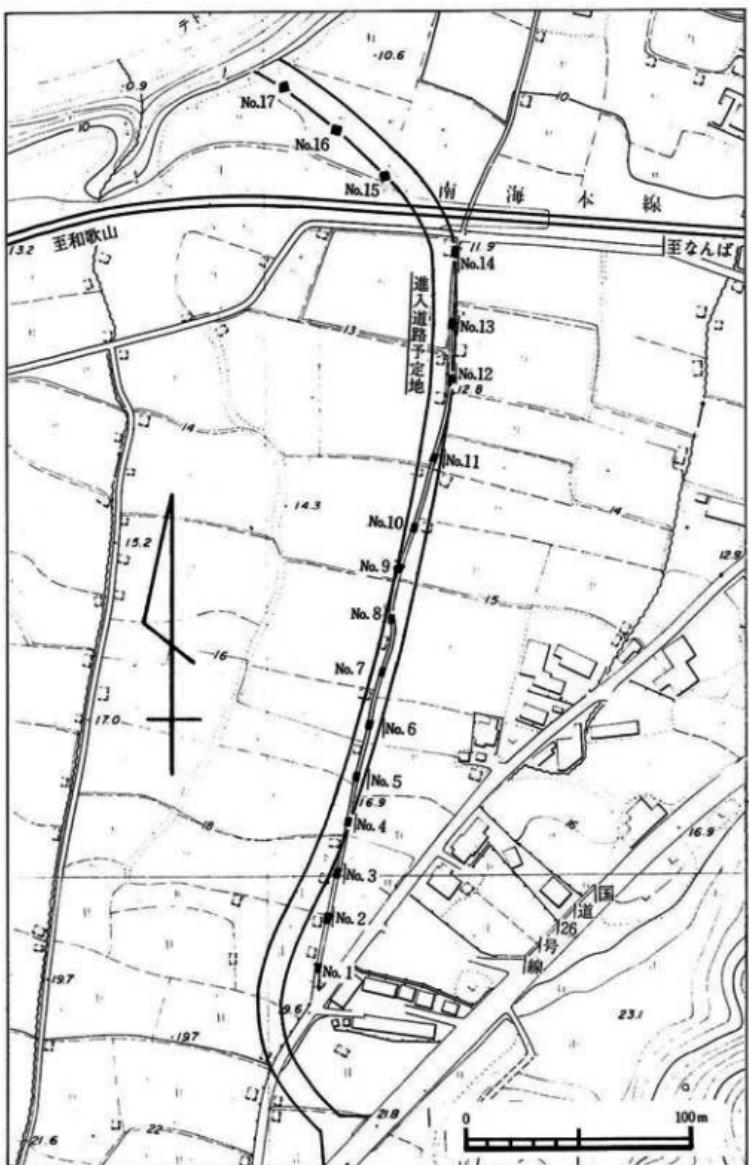
（注3）大阪府史編集専門委員会『大阪府史』1978年

〔III〕調査の目的と方法

大阪府文化財分布図に記載されている田山遺跡は、須恵器、瓦器、サヌカイト、石錐等の散布が認められているが、その範囲及び遺構の有無については確認されていなかった。このような点から、今回の調査では遺跡の広がり、遺構面迄の深さ、遺跡の性格等の把握という点に重点をおき調査を行なった。

調査の対象となった進入路予定地は、国道26号線より南海電鉄本線をくぐり、大阪湾岸に到る延長約550mの規模で計画されているが、おおむねそれらを大きく分けると、中・南域の町道中筋上線沿いと、北域の大坂府青少年対策課が所有するグラウンド部とに分けられる。このうち、中・南域の町道沿いの土地は買収が終っていないことから、町道内にトレーニングを設定することになった。この町道は幅が約2.5m～3.0mしかなく、車の往来を妨げてはならなかったので、止むを得ず、幅1m、長さ3mの規模で、約20mの間隔を置いてNo.1～No.14の、14ヶ所を設定した。また北域のグラウンド部は分布図にのる田山遺跡の範囲よりはずれてはいたが、遺跡範囲の拡大も予想されたので、No.15～No.17の3トレーニングを3m×3mの規模で設定した。

トレーニングの掘削は、全トレーニングとも地山と考えられる無遺物層面迄掘り下げた。町道部では全て人力掘削によったが、グラウンド部については、盛土のなされたNo.15、16トレーニングの盛土除去に機械掘削を行い、下層及びNo.17トレーニングでは人力掘削を行なった。掘削終了後は、真砂土等によって填圧し、旧状に復した。



第3図 トレンチ配置図 (1/2500)

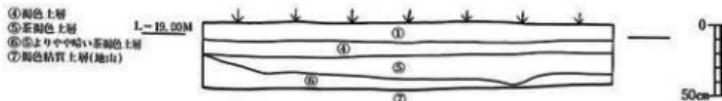
[IV] 調査の結果

町道内に14ヶ所、グランド部に3ヶ所のトレンチを設定したが、グランド部のNo.17トレンチ以外はすべて旧耕土の上に盛土している。従って、層名を記す際は、表土層を①層、盛土層を②層、旧耕土層を③層とし、これは全トレンチ共通とした。層名を記したのは④層以下についてである。また遺構は地山面とおむねその上層で検出された。挿図等の見出しでは、前者を下層遺構面、後者を上層遺構面とした。ただし、No.9トレンチのみは遺構面が3面検出されたので、第1・第2・下層遺構面とした。標高はすべてT.P.である。

No.1 トレンチ

今回調査したトレンチの中で最南端に位置し、海岸から最も離れる。標高は約19mである。

深さ約40cmで粘質褐色の地山に至る。遺構は検出されなかった。遺物としては、地山上の⑥層から磨滅した土師器片が数片出土したにすぎない。

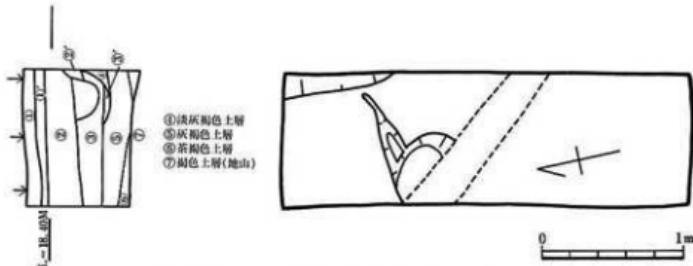


第4図 No. 1 トレンチ断面実測図

No.2 トレンチ

No.1 トレンチの北約20mに設定し、標高は約18.6mである。

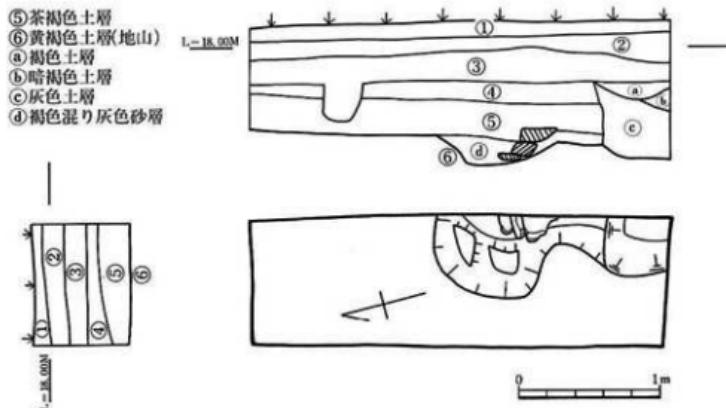
地山面まで約80cmを測るが、トレンチの位置がたまたま土管・溝等によって大きく攪乱を受けた場所にあたってしまった。地山面で、トレンチ北半に自然のものか人為的なものか判断しかねる落ち込みがあった。遺物は地山上の茶褐色土層から瓦器の小破片が2個出土した。なお、旧耕土・盛土からポリ袋1袋分の土師質で厚手の罐片が出土しているが、外面にヘラ状の物で丁と刻んである破片があった（図版17）。



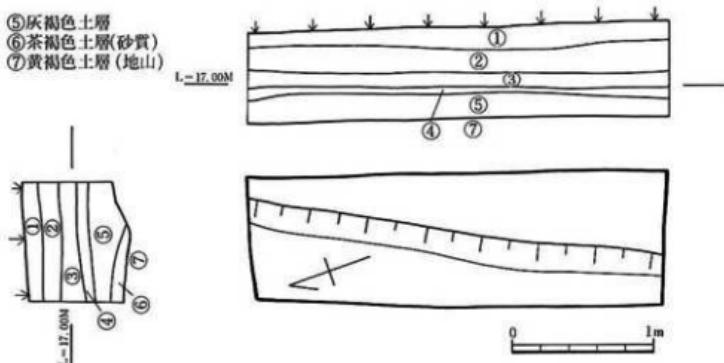
第5図 No.2 トレンチ下層造構面平面断面実測図

No.3 トレンチ

No.2 トレンチの北約20mに設定したトレンチで、標高は約18.2mである。深さ約70cmで地山に至る。トレンチ南側は搅乱を受けていたが、中央部で東に下がる落ち込みが検出された。壁面、底面ともに整ってはいないが、底面北側は南側より一段低くなっているピット状を呈し、内に3個の石がある。重ねたように見えるが定かではない。東壁のボーリングの結果、東側にも石のあることがわかった。建物礎石の根石のようでもあるが、周辺部分を調査してみない限り断言はできない。遺物は①～④層中より土錘、陶器片、土師器片が少量出土しただけである。



第6図 No.3 トレンチ下層造構面平面断面実測図



第7図 No.4 トレンチ下層造構面平面断面実測図

No.4 トレンチ

No.3 トレンチの北約20mに設定したトレンチで、標高は約17.4mである。

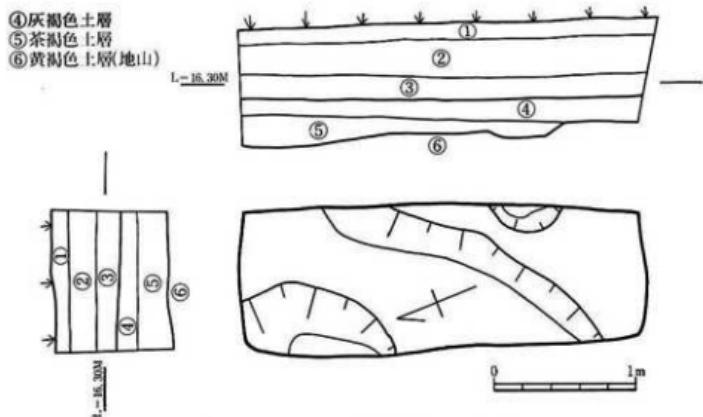
地山面まで約80cmを測る。地山面で西に下がる段状の落ち込みが検出された。深さは約10cmである。溝状遺構、あるいは逆に畦状遺構の可能性が考えられるが、より広範囲の調査結果を待たなければ判断し難い。遺物はこの落ち込み部から須恵質の平瓦片が1個、他に土師器・陶磁器の小破片が出土している。

平瓦は小破片だが、厚さ2.5cmを測る。胎土はやや粗いが、青灰色を呈して焼成良好である。

No.5 トレンチ

No.4 トレンチの北18m付近に設定したトレンチで、標高は約16.7mである。

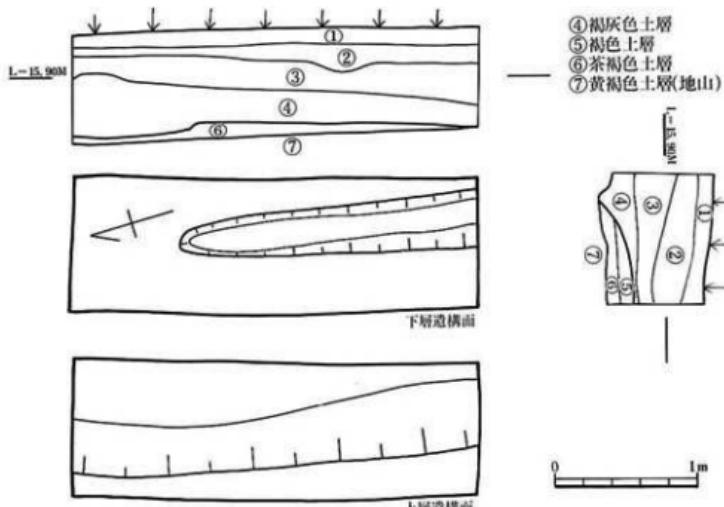
地表面から黄褐色土の堆積する地山面までの深さは約80cmであるが、上部約50cmは盛土と旧耕土が堆積している。旧耕土を除去した面には極く浅いピットが存在し、盛土・旧耕土中より蛸壺、土師質土器、陶磁器の細片が各2、3片出土した。旧耕土下には床土と考えられる灰褐色土が堆積しており、地山面に至る。地山面では深さ約10cmの北東～南西方向に走る落込み、2個のピット状遺構があり、茶褐色土が堆積していた。遺物は灰褐色土及び茶褐色土層より磨滅の激しい、須恵器、蛸壺、土師質土器、近世陶器などが出土した。



第8図 No.5 トレンチ下層遺構面平面断面実測図

No.6 トレンチ

No.5 トレンチの北約20mに設定したトレンチで、標高は約16.2mである。地山面まで約90cmを測る。旧耕土下の褐色土層（④層）を除去すると、東に下がる段状落ち込みが検出された。深さは約15cmである。遺物は④層から土師



第9図 No.6 トレンチ平面断面実測図

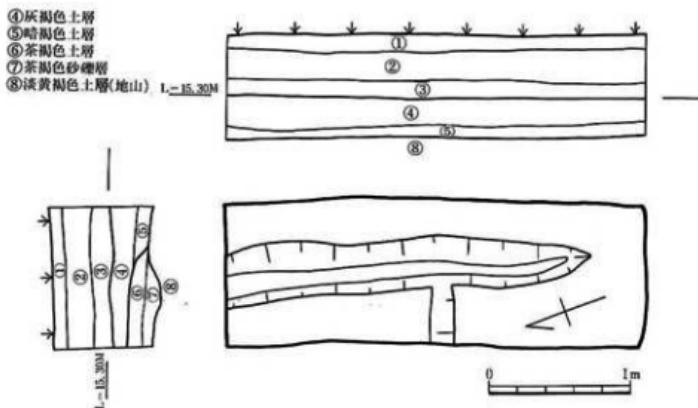
器片・土錐が少量出土している。

さらに⑤層・⑥層を掘り下げると地山面に至るが、ここで南北方向に伸びる小溝が検出された。ごく浅いもので、人為的なものか自然のものか判断しにくい。⑤・⑥層から遺物は出土していない。

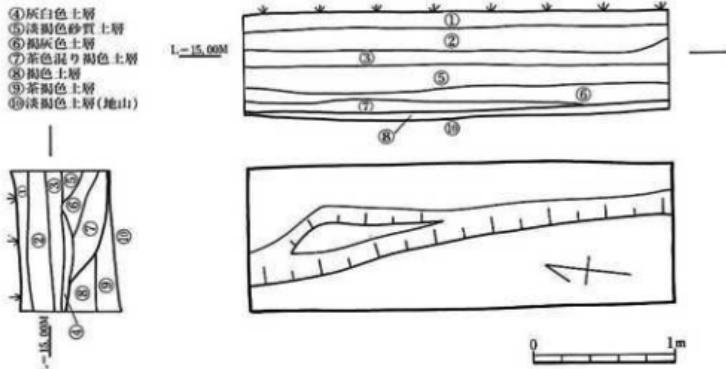
No.7 トレンチ

No.6 トレンチの北方約21m付近に設定したトレンチで、標高は約15.7mである。

地山面には、約70cmで達するが、その過半は、表土、盛土、旧耕土の堆積である。旧耕土除去面は平滑であったが、床土と考えられる灰褐色土を取り除いた面で深さ約10cmの西が高く東に低い落ち込みがみられ、土師質土器、磁器の小片が出土した。灰褐色土の下層は須恵器、土師質皿、螭壺、陶器などを含む茶褐色土が堆積し、淡黄褐色土の地山面に至る。地山面ではトレンチ中央付近より南北方向に伸び途中で切れる溝を検出した。溝の深さは約10cmで螭壺を1片検出した。なお、盛土、旧耕土中より土師質土器、土錐、陶磁器、青磁などが出土している。



第10図 No.7 トレンチ下層遺構面平面断面実測図



第11図 No. 8 トレンチ上層遺構面平面断面実測図

No. 8 トレンチ

No. 7 トレンチの北約20mに設定したトレンチで、標高は約15.2mである。

約75cmで地山に至る。④層を除去すると東に下がる段状落ち込みが検出された。深さは北で約25cm、南で約15cmである。北側で段途中にテラス状の平坦面がある。遺物は娟壺片が少量出土しただけである。

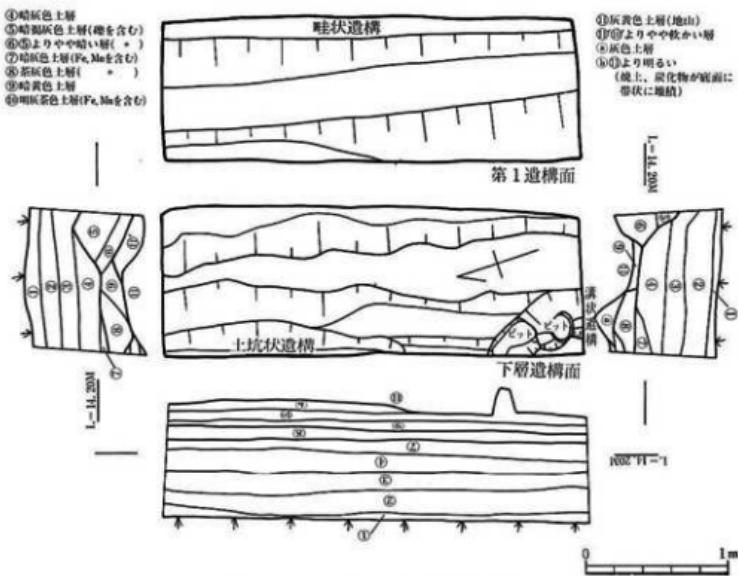
地山面では遺構は検出されなかった。

No. 9 トレンチ

No. 8 トレンチの北約19mに設定したトレンチで、標高は約14.7mである。

地山面までは約80cmの深さであるが、地山面も含めて、3つの遺構面が検出できた。

表土、盛土、旧耕土は、約40cmと、他のトレンチ同様厚く堆積する。第1遺構面は旧耕土下に堆積し、陶磁器、娟壺、土錘等を含む暗灰色土層を取り除いたところで検出した。遺構はトレンチ西端付近に約25cmの厚みをもって南北方向に向かう畦状のものである。第2遺構面は、地表下約70cm付近まで下り、中央部では地山が露頭する。遺構はトレンチの東端及び西端に南北方向の溝状遺構が存在し、東溝は深さ約15cm、西溝は10~15cmである。遺物は東溝より須恵器、須恵質の平瓦、娟壺、青磁の蓮弁碗、西溝では須恵器、須恵質の平瓦が出



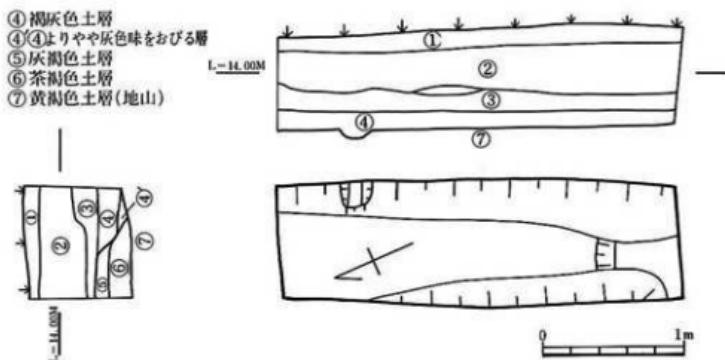
第12図 No.9 トレンチ平面断面実測図

土した。東溝内には直径約5cmの礫が含まれており、そのせいか、瓦の磨滅が激しい。しかし、西溝出土の瓦の内面には布目が認められた。地山面では西端部付近で南北方向の土坑状造構、南東端では溝及びそれを切り込むピット2個を検出した。土坑状造構は深さが約15cmで、焼土が堆積しており、底部には炭化物が帯状にみられた。また遺物は須恵器1片が出土した。トレンチ南西端のピットは溝底より各々10~15cmの深さを有し、瓦器、土師器の細片が入っていた。造構名については、一応、畦状造構、土坑状造構とつけたが、その性格は不明である。

No.10トレンチ

No.9 トレンチの北約16mに設定したトレンチで、標高は約14.2mである。

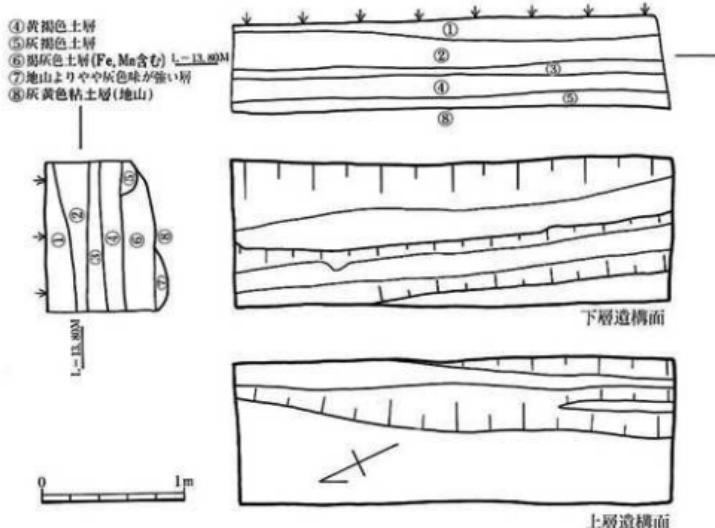
約75cmで地山に至る。地山面では南北方向に溝状造構が検出された。南端が一段下がるが、トレンチの幅が狭く確実な事は言えない。遺物は地山上の⑥層



第13図 No.10トレンチ下層遺構面平面断面実測図

から須恵器、土師器、瓦器の小破片が、上層の⑤層からは螭壺片、須恵器片、陶器片が出土している。

No.11トレンチ



第14図 No.11トレンチ平面断面実測図

No.11トレンチはNo.10トレンチの北約24mのところに設定し、標高は約14.1mである。

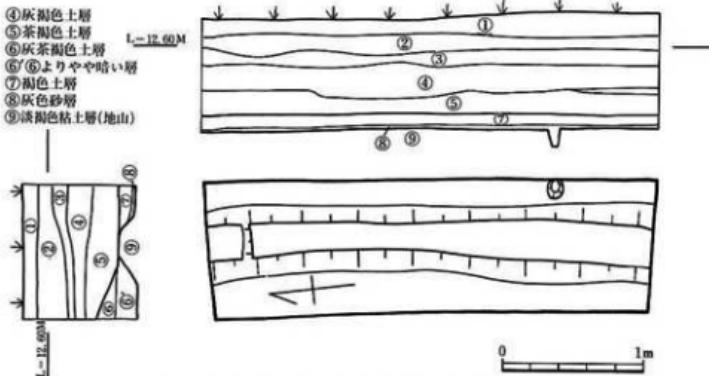
地山面へは約75cmで至るが、遺構面は地山面と床土除去面で検出した。床土と考えられる黄褐色土直下の第1遺構面では、トレンチ東端に南北方向に溝があり、深さは約15cmであった。遺物は黄褐色土層より須恵器、土師質土器、磁器等が少し出土した。また地山面では深さ約10cmの南北方向の溝を検出した。遺物は第1遺構面と地山間に堆積する褐灰色土層に土師質土器、須恵器、瓦質土器が含まれていた。

No.12トレンチ

No.11トレンチの北約22mに設定したトレンチで、標高は約12.8mである。

地山面までは約80cmを測る。旧耕土下の④⑤層を除去すると、西に下がる段状の落ち込みが検出された。深さは約15cmである。遺物は土錘・土師器片が⑤層から出土している。

地山面では南北方向に延びる畦状遺構が検出された。北端で一段下がる。地山を削り出したものである。上端幅20~30cm、下端幅50cm、高さ約12cmである。近年各地で水田遺構の発見が相次いでいるが、当遺構もそれに当たるかどうかの判断は、より広範囲な調査結果に待ちたい。他にトレンチ東南部で、径・深



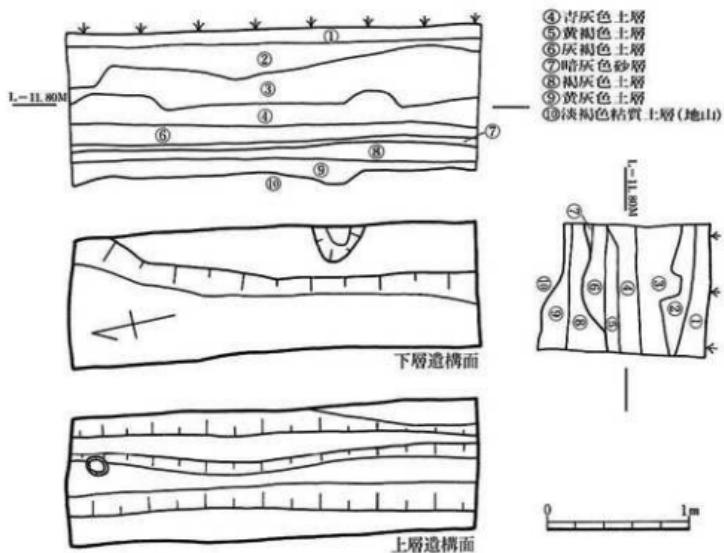
第15図 No.12トレンチ下層遺構面平面断面実測図

さとも約15cmの小ピットが検出された。⑥・⑦層から靖壺片・土師器片が小量出土している。

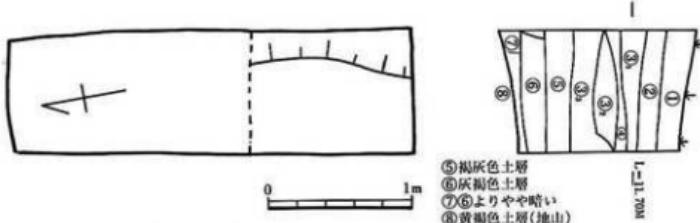
No.13トレンチ

No.12トレンチの北約21m付近に設定し、標高は約12.4mである。

このトレンチは地山面迄の深さが約1mと他のトレンチよりも深い。表土、盛土、青灰色土、黄褐色土の順に堆積しており、第1造構面に至る。上層造構面には2本の南北方向の溝状造構が存在するが、溝間のレベルが低くて、ひとつの大きな落ち込み状を呈する。遺物は落ち込み部より須恵器、土師質土器、靖壺、青磁、瓦器等が出土した。また床土より上層では擂鉢や磁器などの中、近世遺物が出土した。上層造構面と下層造構面（地山）の間には褐灰色土と黄灰色土が堆積しており、30~50cmの厚みをもつ。地山の造構面には上の造構面とは逆に西半分が落ち込んでおり、東端部の高まりでは極く浅いピットも検出



第16図 No.13トレンチ平面断面実測図



第17図 No.14 トレンチ下層造構面平面断面実測図

した。遺物は落ち込み部より須恵器、土師質土器、瓦器、蛸壺などの小片が出士した。

No.14トレンチ

No.13トレンチの北約22m、南海本線のすぐ南に設定したトレンチで、町道部分では北端に位置する。標高約12mである。

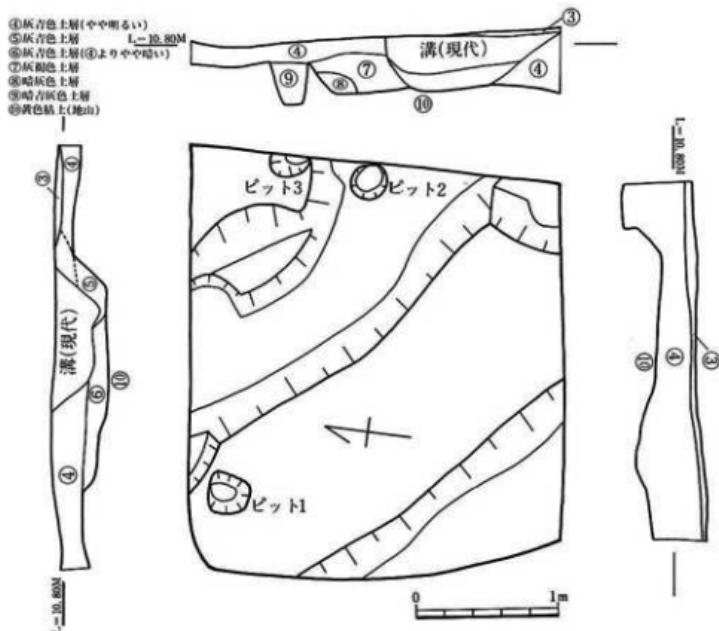
盛土が多いため、地山まで135cmを測る。⑤層除去中浸水が始まり、調査は南3分の1を行いたにすぎない。地山面で東に下がる落ち込みが検出された。自然のものか人為的なものか判断しかねる。遺物は盛土以外から出土していない。

No.15トレンチ

南海電鉄本線に隣接するグラウンド部では一番南東端のトレンチである。

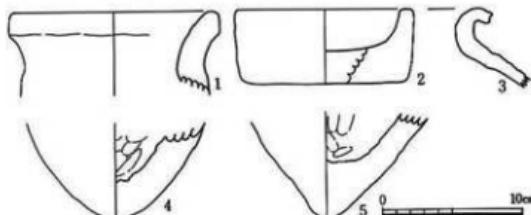
トレンチ設定場所が盛土による南から北の傾斜地であるため、地山面（黄色粘土）迄の深さは、深い所で約2.5m、浅い所では約0.5mであるが、盛土を取り除くと南から北に緩く傾く旧地表面（標高約11m）があらわれる。

遺構面である地山面迄は旧地表面より約30~40cmで至り、北西~南東方向に2本の溝状遺構、及び3個のピットを検出した。この2本の溝状遺構のうち、東の溝は深さが約20cm、幅が約1mのものであるが、盛土前に利用されていた溝と重複して存在した。また、他の方の溝は深さが10~20cmである。ピットは、東の溝中に1個と東の溝を挟む格好で2個検出した。このうちトレンチ北



第18図 No.15 トレンチ平面断面実測図

西部のピットより
煤が付着した焼石
と土師質土器が出
出した。また遺構
面の上には灰青色
土の包含層があり、
比較的多くの靖壺
と少量ではあるが土師質土器・須恵器の甕などが出土した。

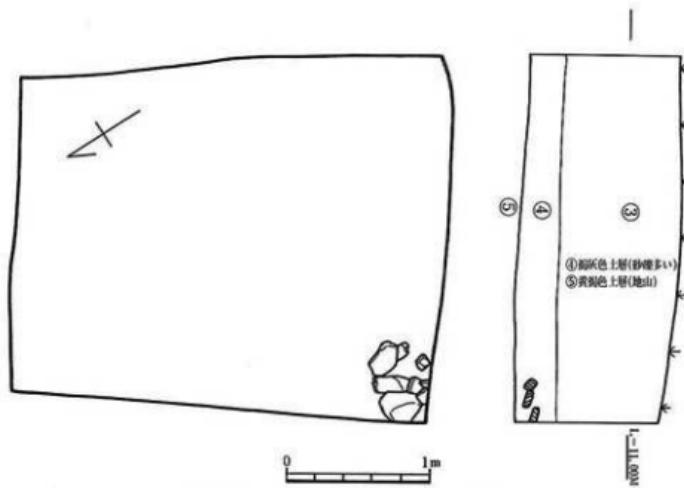


第19図 No.15 トレンチ出土遺物実測図

No.16 トレンチ

グランドの西南隅に設定したトレンチで標高は約11.4mである。

グランド造成時の盛土が約85cmあり、それを除去すると地山までは30cmであ



第20図 No.16 トレンチ平面断面実測図

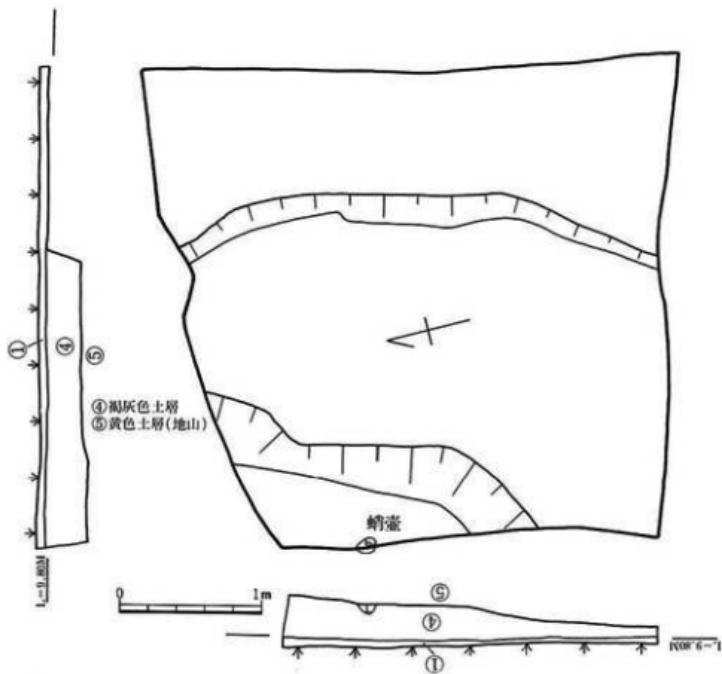
る。ほとんどの部分は床土をはぐとすぐ地山になる。南西隅に人頭大の石の1群があった他は遺構は検出されなかった。しかし、褐灰色土がトレンチ南壁付近から南に層をなしており、これには遺物が比較的多く含まれており、トレンチ南方に遺構の存在が予想できる。石の1群には掘形その他の施設は見つかず、人為的なものと断定はできない。遺物は前記褐灰色土層から蜻蛉、須恵器片が出土している。量は多くない。

No.17トレンチ

調査対象地のトレンチでは最も大阪湾に近く、段丘末端に位置する。

標高約10mの当トレンチは、薄い表土をとるとすぐに地山の黄色土になるが、段丘最末端部の旧地表面の残存状態から、グラウンド造成時に削られていると考えられる。遺構はトレンチ中央付近よりやや東付近から西側が落ち込んで褐灰色土が堆積しており、拳大の礫に混って多くの蜻蛉と須恵器、土師質の土器片が出土した。

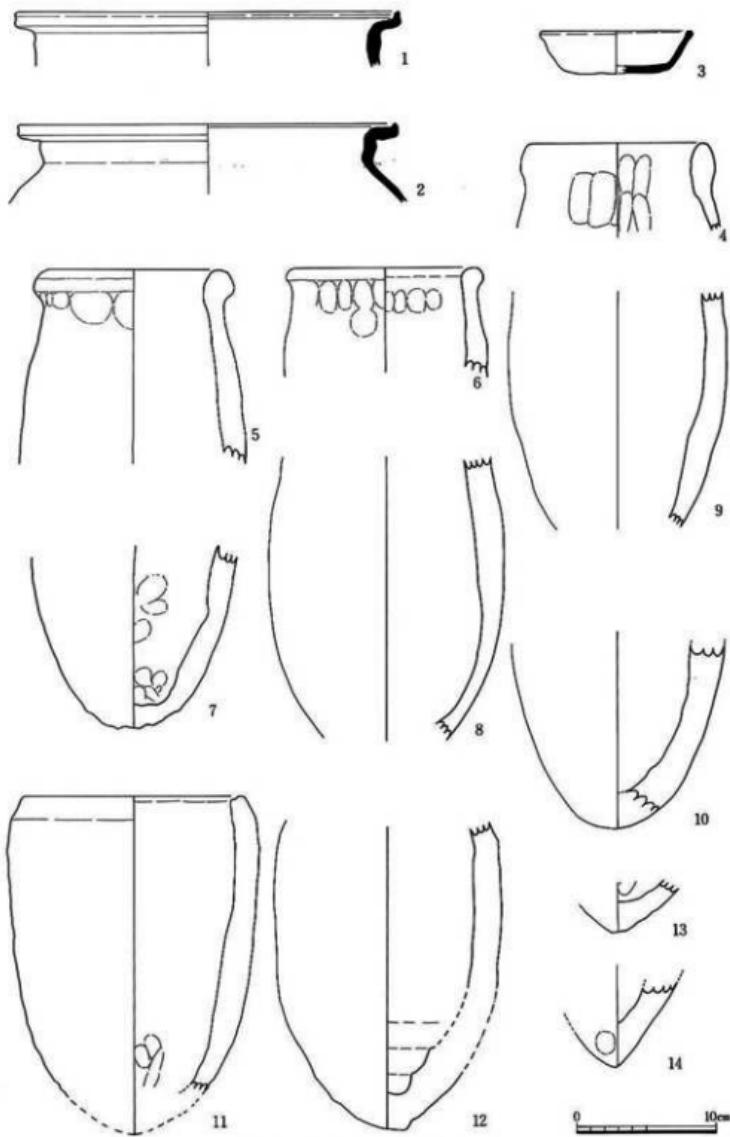
蜻蛉は口縁、底部共に2種類の異った形状のものが含まれており、口縁では、①胴部より内側に緩くすぼんで終わるもの、②胴部よりややすぼみ気味で口縁



第21図 No.17 トレンチ平面断面実測図

下付近がくびれ、口縁が外側に開くものとにわけられる。また底部では、①V字形に尖るもの、②丸く終るものとにわけられる。遺物整理では、底部より口縁へと一つになるものは無かったのでどのような形の蛸壺になるのかはわからなかった。ただ、ここで2種類の蛸壺になるということを前提としてその口縁、及び底部の組み合わせを考えると、①口縁下のくびれのないものは底部の形がどちらであろうとも網のようなものを編まなければ使いにくいと考えられることから、底部には抵抗の少ないV字形のものより、丸味を帯びたものが適している。また、②口縁下にくびれのあるものは、底部がどのような形状であっても、くびれ部に紐をかけねば問題はないのでV字形でもよいとされよう。

須恵器は、甕の口縁付近より胴部にあたり、外面には平行叩きを施し、内面はすり消しによって仕上げられている。土師質の土器片は口縁部付近が2個出



第22図 No.17トレンチ出土遺物実測図

土しており、弥生時代中期の甕、壺とも見うけられるし、中世頃の堀のようでもある。出土土器が小片のため、その判断は難しいが、胎土等の特徴から和歌山方面でつくられたものと思われる。

[V] ま と め

試掘で小規模ながらも、田山遺跡が初めて発掘調査されたわけであるが、17ヶ所のトレンチのうち、ある程度性格のわかる遺構が検出されたのは、No.9、No.15、No.17の3トレンチである。それらは、No.9—炭層の認められる土坑状遺構、溝、ピット、No.15—溝、ピット、No.17—蛸壺と須恵器の入った土坑でありいずれも地山面で検出された。時期は、瓦器、蛸壺、須恵器等の出土遺物から平安～鎌倉時代のものと思われる。
(注1)

地山面では他にもNo.1、No.8トレンチを除いて、No.2、No.3、No.5で落ち込み、No.4、No.11、No.13、No.14で段状の落ち込み、No.6、No.7、No.10で溝状落ち込み、そしてNo.12で畦状遺構、No.16で石組（？）が検出された。No.12トレンチの畦状の高まりは明らかに地山を削り出しているので人為的なものと見てかまわないであろう。段状の落ち込みとしたものはやや幅の広い畦状遺構か、溝の肩部の可能性が考えられる。No.10トレンチも同様に考えられる。No.3トレンチの落ち込みについては、[IV]で述べたように周辺の調査をしてみなければ何とも言えない。No.16トレンチの石組（？）についても同様である。

No.2、No.5トレンチの落ち込み、No.6、No.7トレンチの小溝については遺構と判断する根拠が今のところとぼしいと思われる。

地山面までの深さについては、調査地のほとんどに盛土があったためや深いが、盛土を除けば、旧耕土を含めても約30～50cmである。

上層の遺構については、No.6～No.9、No.11～No.13トレンチで検出されたが、大部分が段状の落ち込み、あるいは溝状の落ち込みである。遺物には近世の陶磁器類、土錘等があるが、明確な時期を決定するには至らなかった。深さは旧耕土を入れて約15～30cmである。

明確な遺構が検出されたNo.15、No.17トレンチについては、遺物の点から見ても今回出土した遺物総量コンテナ3箱半のうち2箱が両トレンチから出土しており、相対的ながらも、今回の調査結果からすると、南海本線以北に遺構が密集していることを想定しうる。その他、遺構と考えられるものが検出されたのは、No.3、No.4トレンチを除けばNo.9トレンチ以北に多い。

さて、田山遺跡は扇状地性の台地にのっているが、今回の調査トレンチは、北部海側が台地の中心に近く、南へ行くほど中心からはずれていく。今回の試掘で、No.15、No.17トレンチを含めて、No.9トレンチ以北で遺構・遺物の検出が多く、南で少なかった原因の一つをこのような地形との関連に求められないであろうか。この想定が的を得たものであれば南部では試掘トレンチを設定した町道の西側に遺構の存在を予想すべきだと思われる。

最後に遺跡の年代についての問題であるが、今回は遡っても平定～鎌倉時代までの遺構しか検出されなかつたが、出土遺物と表採資料中に少量ながら奈良時代の土器が含まれており、更に弥生式土器の可能性のある土器片が出土している。従って、その時代の遺構の存在も予想される。

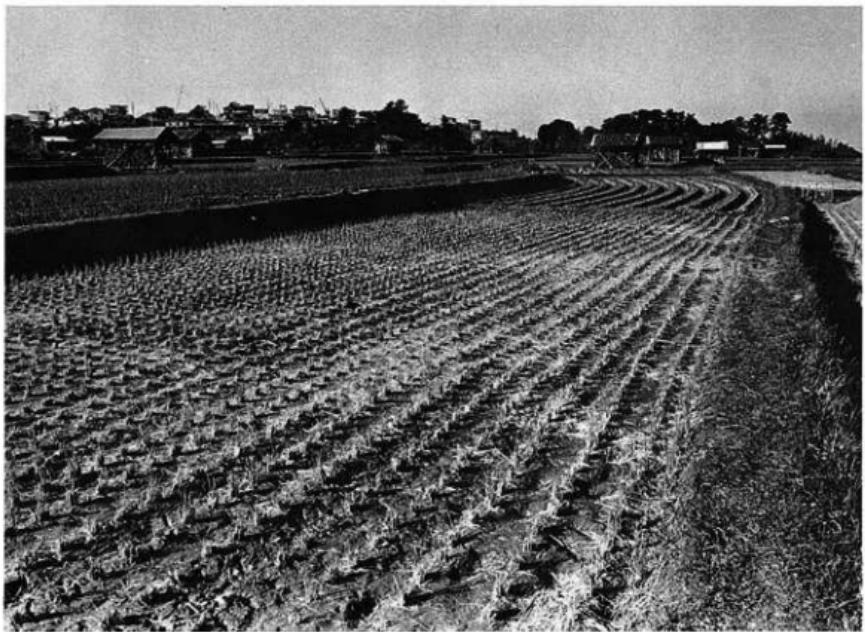
以上、試掘調査の実施結果より、南海本線以北は全面調査の必要があり、以南はより密度の濃い再試掘が心要であると思われる。

〈注1〉 大園遺跡調査会『大園遺跡』—発掘調査概報2—1976年3月

図 版



南より大阪湾方面



南より田山稻荷方面



町道中筋上線（中央より南方面）



青対グラウンド（東より西方面）



No. 1 トレンチ下層遺構面



No. 2 トレンチ下層遺構面



No. 3 トレンチ下層遺構面



No. 4 トレンチ下層遺構面

No.
1
·
3
·
4
トレンチ
断面

No. 1 トレンチ
北壁



No. 3 トレンチ
落込み



No. 4 トレンチ
東壁





No. 5 トレンチ下層遺構面



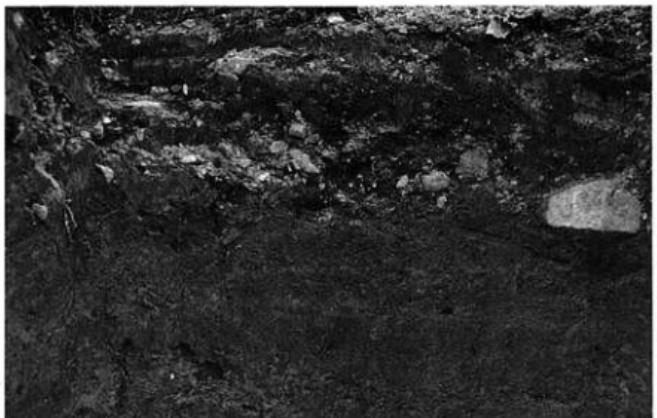
No. 6 トレンチ下層遺構面



No. 7 トレンチ上層遺構面



No. 7 トレンチ下層遺構面



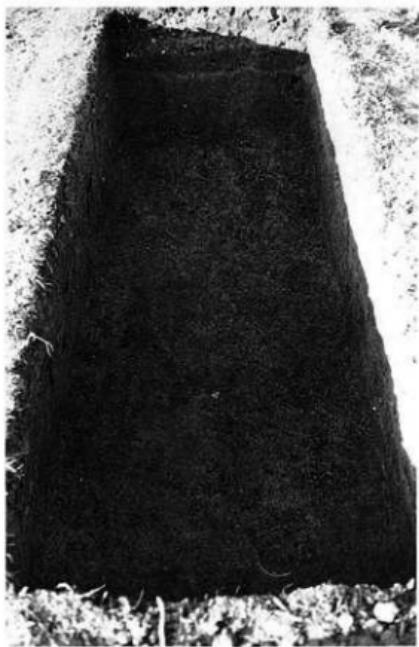
No.5 トレンチ
南壁



No.6 トレンチ
東・南壁



No.7 トレンチ
東・南壁



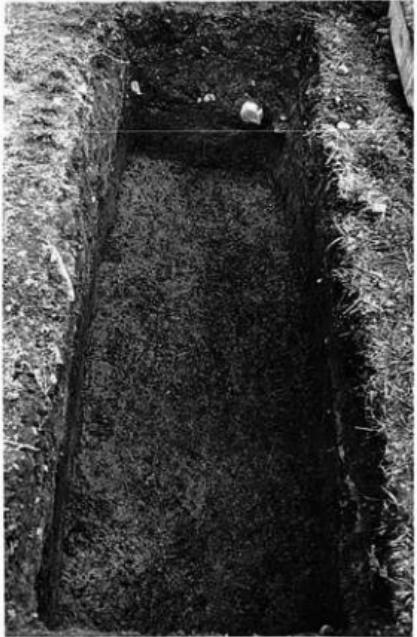
No. 8 トレンチ下層遺構面



No. 9 トレンチ第2遺構面



No. 9 トレンチ第3(下層)遺構面

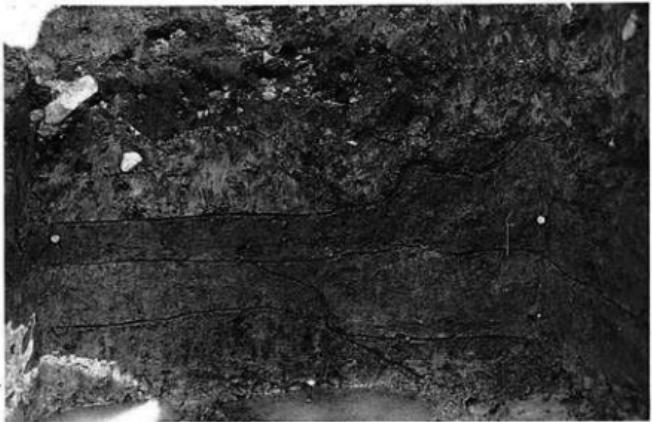


No.10 トレンチ下層遺構面

No.8 トレンチ
北壁



No.9 トレンチ
西・北壁

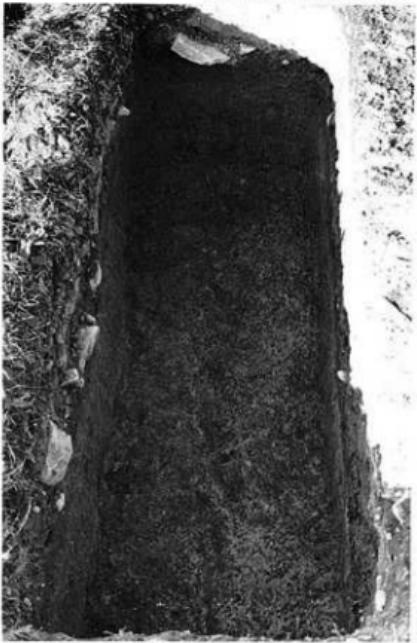




No.11トレンチ下層遺構面



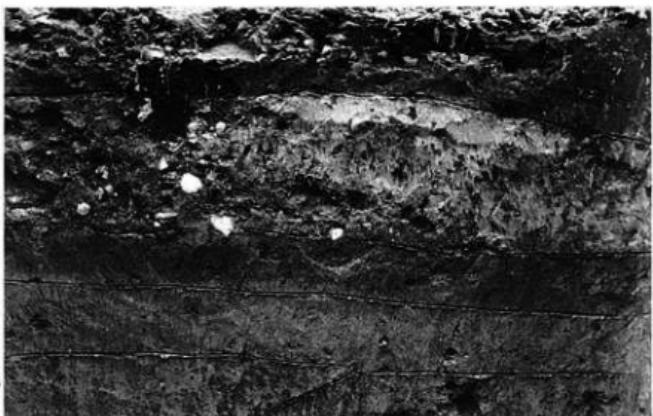
No.12トレンチ下層遺構面



No.13トレンチ下層遺構面



No.14トレンチ下層遺構面





地山面



ピット



地山面



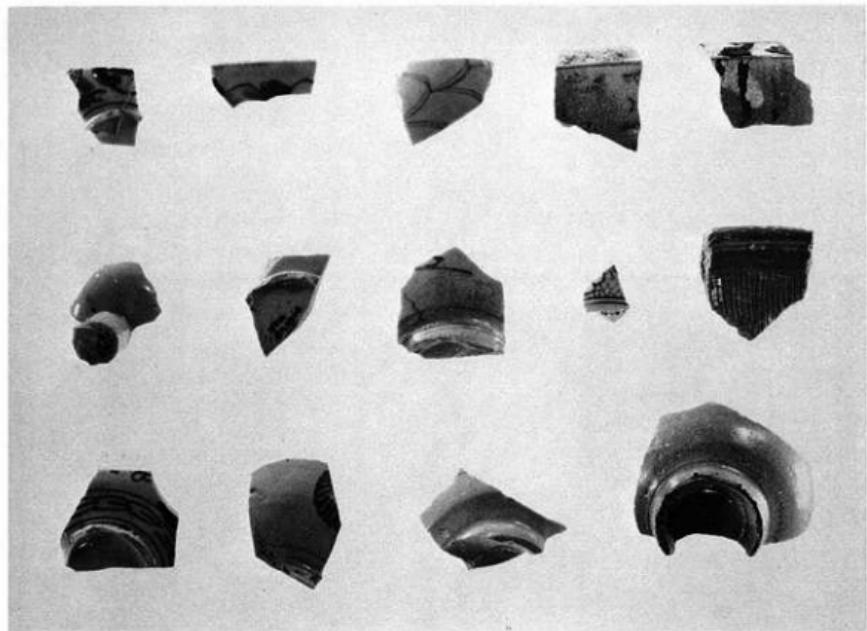
石組み



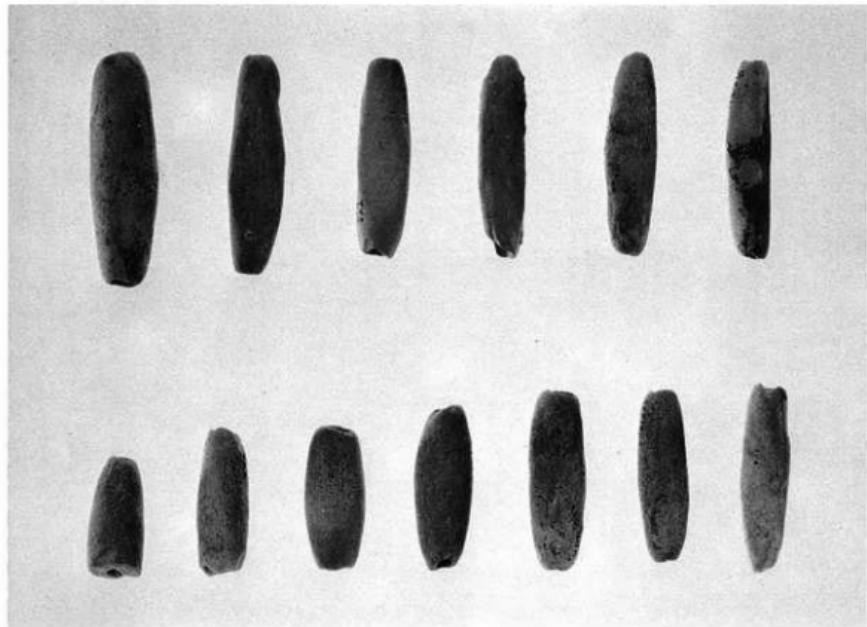
地山面



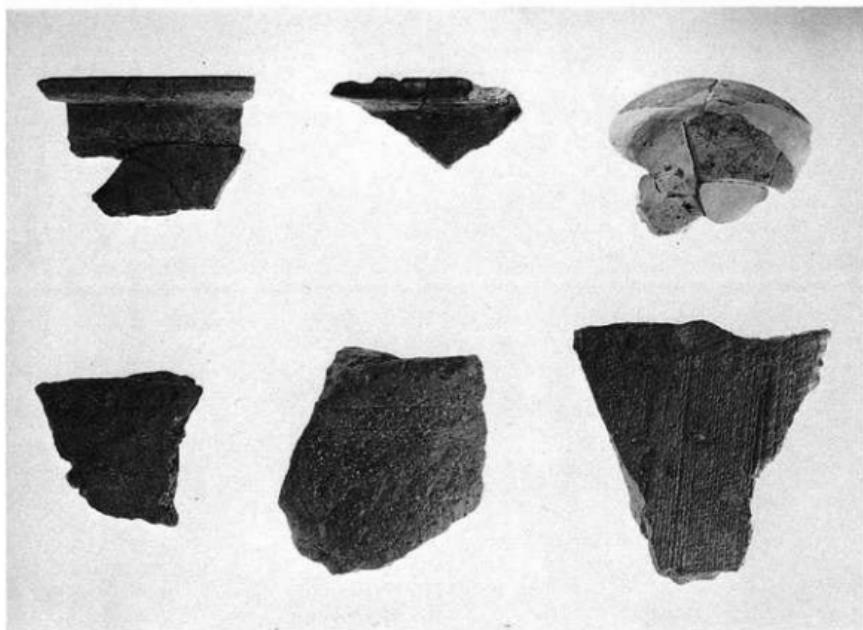
蛸壺底部出土状態



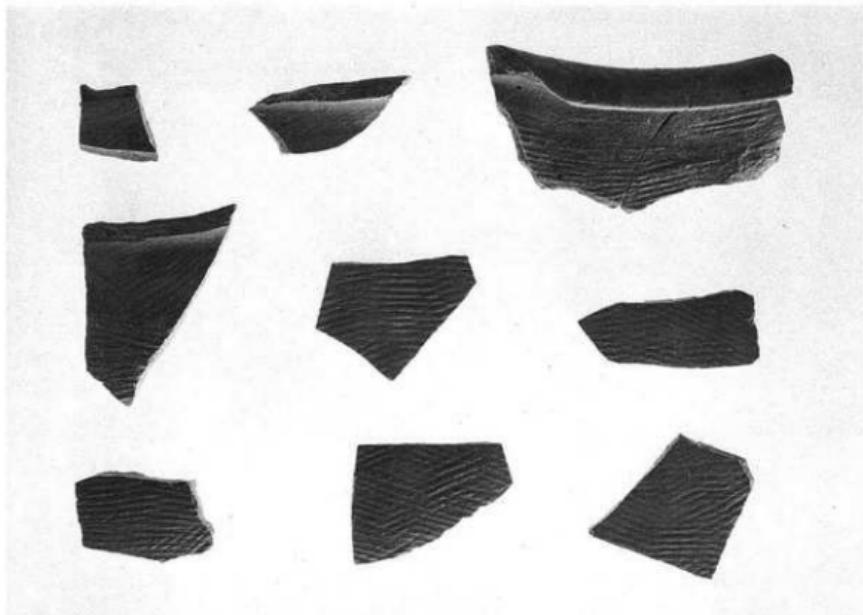
陶磁器



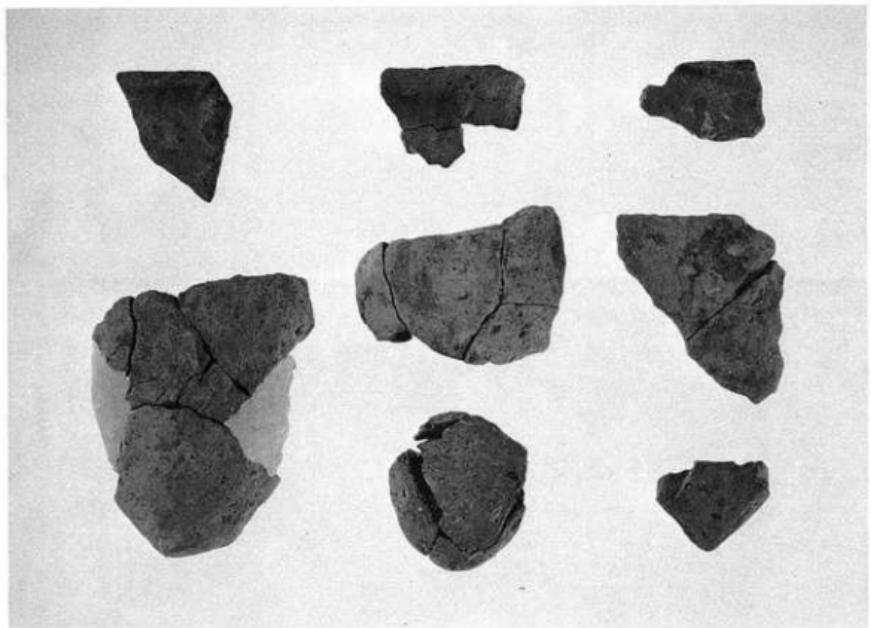
土錘



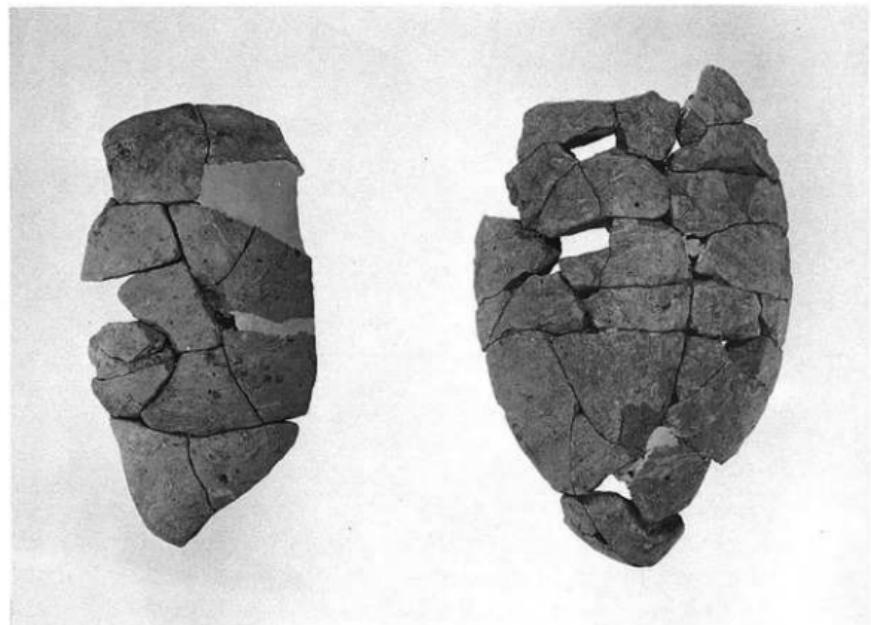
土師質土器(1.2-No.17トレンチ) 瓦質土器(3-No.17トレンチ) 須恵質瓦(4-No.6, 5-No.9トレンチ出土)



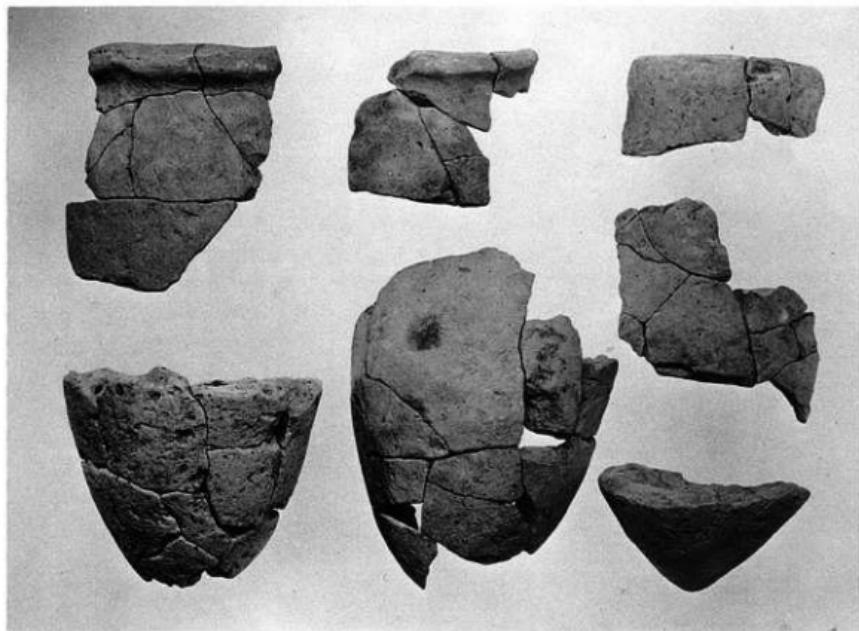
須恵器 (No.17トレンチ出土)



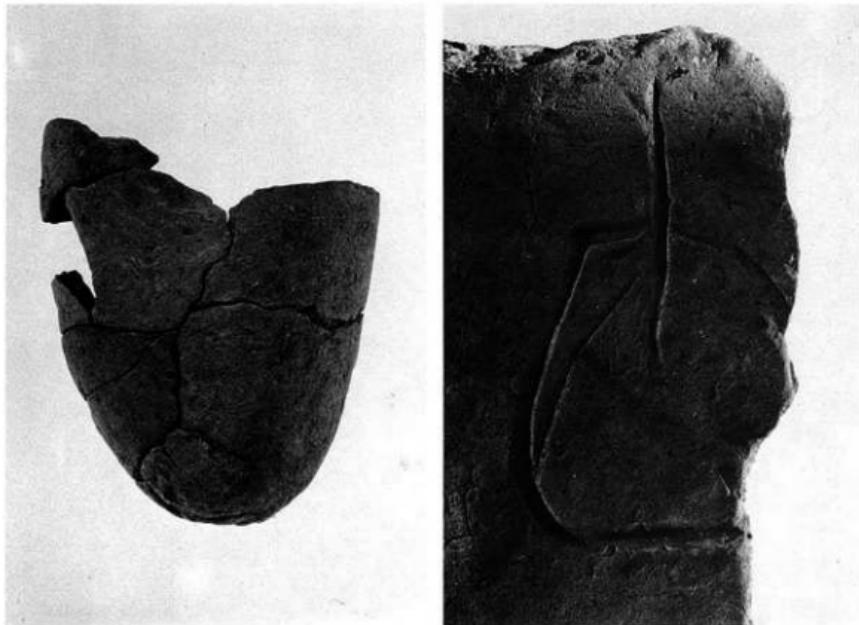
蛸壺 (No.17トレンチ出土, 中央の上と下はNo.15トレンチ出土)



蛸壺 (No.17トレンチ出土)



銅壺 (No.17トレンチ出土, 右下のみNo.15トレンチ出土)



銅壺 (No.17トレンチ出土)

銅壺の刻線文様 (No.2トレンチ出土)